

流通形態における資本の三形式の展開について

汪 春 梅

要 旨

『資本論』中の商人資本、高利貸資本、産業資本这三种資本，在其形式展開の论证中的定位是不明确的。马克思认为在流通形态中，商人资本和高利贷资本自身不能产生价值增殖，因此并没有把两者作为独立的资本形式来论证，而是把包含生产要素的産業資本作为自身可以进行价值增殖的完全的資本形态来论证的。但是資本和商品、货币一样，都是通过流通，在共同体之间产生的，和生产关系并没有必然的联系，因此应该在纯粹的流通论中，对于資本の三種形式进行论证。本論文通过对马克思、宇野弘蔵和山口重克の论证的研究，重新对限定在流通論中の資本の三形式进行讨论，并且以对追求价值增殖作为其内在的发展动力，尝试对資本の三種形式展開の順序进行理論的闡述。

キーワード……流通形態 資本形式 市場的な論理 価値増殖 内的な動力

はじめに

マルクスは『資本論』の第二編第四章の「貨幣の資本への転化」の中で、 $G - W - G'$ を資本の一般的定式として規定しながら、続いてその一般的定式の矛盾を「資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかで発生してはならない」(K.I,S.180)と設定し、 $G - W - G'$ は単なる流通形態として存立しえないと論じる。そしてこの矛盾は資本が労働・生産過程を内的に取り込むことによって解決が可能だと結論付ける。結局、マルクスは資本を産業資本と同一視することになったのである。

このように、マルクスは当初 $G - W - G'$ 商人資本および $G - G'$ 高利貸資本をも包括する一般的形式を資本形式として明らかにしようとしながら、実際の展開上ではこれらの資本形式を排除することになったといつてよい。要するに、マルクスは $G - W - G'$ と $G - G'$ の資本形式について規定しえなかったわけである。しかし、これらの資本形式を資本形式論から排除するわけにはいかない。宇野弘蔵はこの点について次のように論じた。

「資本は、商品や貨幣と同様に、いわば共同体と共同体とのあいだに発生するものであって、むしろ生産関係の如何にかかわりなく、一定の商品 貨幣流通の発展さえあれば出現するのである。商人資本はそのことを示している。商人資本や金貸資本を資本でないというのは、資本なることばを否定するものであるし、また産業資本の商人資本的一面を見失うことになる。」

（宇野[1969]：10）

宇野が指摘したように、商人資本と金貸資本は資本でないとする事はできない。確かに、労働力の商品化を基礎として資本が社会的生産を包摂することによって資本主義社会が成り立つのである。しかし労働力商品がなければ、 $G - W - G'$ という資本形式は成立しないとはいえないであろう。実は資本主義に先立つ諸社会では、 $G - W - G'$ や $G - G'$ は具体的に商人資本と高利貸資本として現れたのである。市場が存在する限り、金貸資本形式、商人資本形式、産業資本形式という資本の三形式は論じられる。

マルクスと違って宇野は商人資本と高利貸資本を資本形式の中に位置付けたが、しかし、宇野は資金から資本への展開を論理的な展開としていたのに対し、資本の三形式の展開では「歴史的なるものを背後において」（宇野[1967]：318）考えていたのである。周知のように、宇野の『経済原論』は流通論、生産論、分配論という三篇構造をとっている。『資本論』の第一巻の第一、第二篇に相当するところは「資本の生産過程」の外に出し、第一篇流通論として独立させたのである。したがって、『資本論』の「貨幣の資本への転化」は、宇野の『原論』では流通論の第三章「資本」に対応するわけである。宇野は商人資本や高利貸資本を論理的に流通形態として論じるとしながらも、他方歴史上存在した商業資本、金貸資本を論理展開の背後にあってその「指針を与えるもの」（宇野[1969]：42）とし、資本形式の展開を論じた。結果的にその展開と対置する形で、産業資本の必然性が歴史的條件を踏まえて提示されるという方法がとられている。しかし、歴史的な要素によって資本の三形式の展開を説明することは、そもそも宇野が独自に提出した流通論を独自の領域として取り出し論理的に展開する方法と不整合になっているといわざるをえない。流通論における資本の三形式の展開を論じる場合、むしろ流通形態として純化された資本形式として検討したほうが妥当であると考えられる。本論文ではマルクスの『資本論』の第二篇第四章「貨幣の資本への展開」、宇野の『経済原論』を検討したうえで、流通論における純化された資本三形式の展開を検討する。

一 『資本論』の第二篇第四章「貨幣の資本への転化」の検討

1-1 マルクスの「資本の一般的定式」についての検討

マルクスは「資本の一般的定式」を論じる時、商品流通形態において、まず流通形態 $W - G - W$ が見いだされるが、次いで、それと「独特に区別される」（K.I.S.162）第二形態 $G - W - G$ が見いだされると論じた。そして、両者の質的、量的な相違点を比較しながら、後者の $G - W - G$ にそくしながら流通運動を行う貨幣は資本に転化することを論じた。即ち、 $G - W - G'$ を資本の一般的定式として規定したのである。その「資本の一般的定式」について検討してみよう。

マルクスは第一節「資本の一般的定式」の冒頭で、貨幣から資本への転化について、「商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発達した商品流通 商業 は、資本が成立する歴史的前提をなす。世界商業および世界市場は、十六世紀に資本の近代的生活史を開く」(K.,I,S.161)と述べた後、続いて「資本の成立史を回顧する必要はない」(K.,I,S.161)といい、歴史的説明を論じる必要はないことを強調した。そして、資本について、次のように論じた。「商品流通の素材的内容、すなわちさまざまな使用価値の交換を度外視して、この過程が生み出す経済的諸形態だけを考察するならば、われわれは、この過程の最後の産物として、貨幣を見いだす。商品流通のこの最後の産物が、資本の最初の現象形態である。」(K.,I,S.161)

マルクスが論じたように、貨幣から資本への転化を論証するさいには歴史的な要因に依拠しないことは評価できるであろう。「ブルジョア社会の解剖」をするためには、『資本論』は経済原論として純化した資本主義の下で検討する必要があるからである。周知のように、商品経済はもともと共同体と共同体の間の生産物の交換から発生したものであるから、商品流通形態は生産に直接に関係あるものではない。資本主義は一定の歴史的な条件のもとに社会的生産を包摂し、編成することによって成立した。こうしたことを踏まえると宇野弘蔵が経済原論を流通論、生産論、分配論という三篇構成で論じたことは有効だと考えられる。簡単に言えば、商品、貨幣、資本をまず純化した流通形態として分析し、「生産論」ではそうした資本が社会的生産を包摂したことを対象にして分析し、「分配論」では資本を編成することを分析するという方法である。したがって、流通論における商品流通の市場的論理のアプローチから資本を考察すれば、歴史的な要因に依拠する必要はないと考えられる。

しかしここで問題とすべきなのは、マルクスはただ「商品流通は資本の出発点である」と述べ、また「商品流通のこの最後の産物が、資本の最初の現象形態」であるとしながら、いかにして商品流通から資本が形成されるのか、あるいはいかにして「貨幣」が資本を形成させることになるのかという点を明らかにしていないことである。

この点をマルクスの記述に即しながらみてみよう。マルクスは商品流通形態 $W - G - W$ と「独特に区別される」(K.,I,S.162) 第二の形態 $G - W - G$ の運動によって、資本は「生成」されると論じた。そして、マルクスは穀物と衣装を用いた例を挙げ、 $W - G - W$ の両極においては、同じ大きさの価値を持つ商品であるが、それは質的に異なる使用価値であるといい、それに対し、 $G - W - G$ においては、 G は質的に同じものなので、量的に異なることによってその内容が与えられる、すなわち $G - W - G'$ となると論じた。最後の点は次のように論じられている。

「過程 $G - W - G$ は、その両極がともに貨幣であるから、両極の質的区別によってではなく、もっぱら両極の量的な相違によって、その内容が与えられる。最初に流通に投げ込まれたよりも多くの貨幣が、最後に流通から引き上げられた。……それゆえ、この過程の完全形態は $G - W - G'$ であり、この G' は、 $G + G$ すなわち、最初に前貸しされた貨幣額プラス増加分、に等しい。この増加分、または最初の価値を越える超過分を、私は剰余価値と名づける。それゆ

え、最初に前貸しされた価値は、流通のなかで自己を維持するだけでなく、流通のなかで価値の大きさを変え、ある剰余価値を付け加える。すなわち自己を増殖する。そして、この運動が、それを資本に転化させるのである。」(K.,I,S.165)

このように、マルクスはまず G - W - G 形式の両極は量的に異ならなければならないとし、G - W - G' を導き出す。そしてこのように導出した G - W - G' の最初の G は「資本になる」(K.,I,S.170)ことを、また、その G - W - G' が、「直接流通面に現われる資本の一般的定式」(K.,I,S.170)であることを論じた。

以上のマルクスの議論を整理すると、次のようになる。マルクスは最初に G - W - G' を導き出す出発点において、W - G - W と G - W - G とを同じ次元で論じる。すなわち W - G - W が存在すると当然 G - W - G も存在するものとし、そのようにして導出した G - W - G を W - G - W と比較しつつ議論を展開するのである。しかしマルクスは「商品と貨幣」において、W - G - W は商品所有者のはじめの行為であると論じた。すなわち、商品所有者は本来必要とするものを手に入れたい場合は、彼らが自分の持っている商品を手に入れたい商品と交換するしかない。お互いに便利に交換するため、媒介としてある特定商品を一般的等価物にするようになる、その特定商品の自然形態が社会的に通用する等価形態となり、すなわち貨幣になると論じたのである。このように、マルクスは流通形態の主体の行為にそくしながら W - G - W を論じた。これに対して G - W - G についてはこのような考察がいっさいなされずに W - G - W と同格なものとして取り上げられている。マルクスはただ貨幣のその「大きさの増大によって富自体に近づく」ことによって、「販売のための購買が行われる各個の循環の終わりは、おのずから新たな循環の始まりをなす」といい、「資本の運動には際限はない」(K.,I,S.167)と論じている。このようにマルクスは G - W - G を流通形態の主体にそくしながら理論的に導き出すという展開は行っていない。

G - W - G を論証する場合には、むしろ W - G - W と同じように、流通主体の動機に即しながら考えるべきであろう。現実の市場では、異なった条件によってどうしても商品の価格差が存在する。富を追求するためには、商品の時間的価格差ないし場所的価格差を利用して増殖行動を展開しようとする商品所有者は出てくるはずである。こうして「ある時点ないし地点で商品を安く買ってほかの時点ないし地点で高く売るといふ商品売買形式によって、貨幣をいったん手放し、より多くの貨幣として引上げようとする」(山口[1985]: 58) G - W - G' という流通形態も出現したと考えてよいであろう。

次いで、マルクスは第二節の冒頭で G - W - G' は「以前に展開されたいっさいの法則に矛盾する」(K.,I,S.170)と論じ、「一般的定式」の矛盾について議論するのであるが、さらにマルクスの記述を検討していこう。

1-2 「一般的定式の諸矛盾」および産業資本の導出方法についての検討

マルクスは商品流通の現象が純粋に進行する場合には、商品は等価物同士として交換されると論じ、「商品は、その価値から背離した価格で売られることもありうるが、しかしその背離は商品交換の法則の侵害として現れる。商品交換は、その純粋な姿態においては、等価物どうしの交換であり、したがって価値を増やす手段ではない」(K.,I,S.173)と主張した。このような前提で、「一般的定式の諸矛盾」を論じた。

すなわち、マルクスは $G - W - G'$ を $G - W$ と $W - G$ と二つの過程に分けて考え、両形態のいずれにおいても、商品はそれ自体商品で、貨幣はそれ自体貨幣であって、剰余価値を生じないと論じた。そして、マルクスは $G - W - G'$ が自己増殖して剰余価値を生じなければ、その新たな循環はスタートできないと立論しているために、「資本の一般的定式」の矛盾が生じると論じられたのである。「資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から発生しないわけにも行かない。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかで発生してはならない」(K.,I,S.180)という矛盾が生じるわけである。これを解決するのは「価値の源泉であるという独特な性質をその使用価値そのものがもっているような一商品」(K.,I,S.181) すなわち、労働力商品によらなければならないとするのである。

確かにマルクスが示したように価値増殖あるいは価値量の変動についての「矛盾」は、労働力商品によって解決されると論じることできる。しかし、商品の価値量が不変であるというマルクスの考えには問題があるであろう。かりに価値が労働量によって規定されるというマルクスの理論にそくして論じたとしても、その価値量は社会的平均労働によるものであるから、技術や労働の評価が変化すると、当然商品価値も変化する。しかも市場が社会的生産を包摂していることを前提できない流通論にあっては、労働の単純化も社会的関連も論じられないので、そもそも労働が価値の源泉ということ論じることが難しい。流通形態における価値概念はより広義なものとして規定しなければならないと思われる。このような広義の価値規定について、山口重克は次のように論じている。

「商品はその所有者にとってほかの何らかの有用な商品と交換されるべきものである。所有者にとっては、所有商品には直接の有用性はない。他と交換されうるということがその商品の所有者にとっての有用性である。そこで、商品はまずなによりも他者の物との交換性を持つ物であると定義することができる。商品の交換性を商品の価値と呼ぶ。」(山口[1985]:15)

以上の山口の論証は妥当であろう。流通論の次元で労働によって価値規定を論じることではできないであろう。したがって、その前提で設定した「一般的定式の矛盾」にも問題があると考えざるを得ない。

マルクスは産業資本を次のように導出した。第三節の「労働力の購買と販売」では、価値の変化は「商品の消費から生じる」(K.,I,S.181)と考えるほかはなく、そのためには「わが貨幣

流通形態における資本の三形式の展開について（注）

所有者は、流通部面の内部で、すなわち市場において、一商品 その使用価値そのものが価値の源泉であるという独自の性質をもっている一商品を、したがってその現実的消費そのものが労働の対象化」（*K.,I,S.181*）である労働力商品を購入し、消費する他はないと論じた。

こうして、マルクスは労働力商品の売買を取り上げることによって、 $G - W \dots P \dots W' - G'$ 、すなわち産業資本だけが「資本」となるという論理を展開したが、同時に商人資本や高利貸資本は完全に考察の対象から外されたのである。マルクスはこれについて次のように論じた。

「資本の歴史的な実存諸条件は、商品流通及び貨幣流通とともに定在するものでは決してない。資本は生産諸手段および生活諸手段の所有者が、みずからの労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合のみ成立するのであり、そして、この歴史的な条件は一つの世界史を包括する。それゆえ、資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する。」（*K.,I,S.184*）

以上の論証から見れば、マルクスは第四章「貨幣の資本への転化」を問題にするさいに、その冒頭では、「資本」というのは、 $G - W - G'$ という流通形態をもってその一般的定式としていたが、結局労働力商品を購入する産業資本すなわち、 $G - W \dots P \dots W' - G'$ にそくした規定を与えることになった。このように検討するとマルクスの前後の論証は不整合になっているといわざるをえない。

1 - 3 マルクスの資本形式の展開についての問題点

マルクスは資本を論じる際には、流通形態において $G - W - G'$ を「資本の一般的定式」と規定したが、結論的には労働力商品が売買されて始めて $G - W - G'$ が成立すると導き出すことになる。つまりマルクスは特殊な歴史的な条件のもとで成立する産業資本にそくして資本を定義したことになる。その結果、商業資本と高利貸資本とを「社会的生産過程の一時代」（*K.,I,S.184*）と直接関係のない資本形態であるという点で産業資本と区別することになった。

しかし、流通形態において $G - W - G'$ 商人資本および $G - G'$ 高利貸資本をも包括する一般的形式としてはこれらの資本形式を排除するわけにはいかない。マルクスは $G - W - G'$ と $G - G'$ の資本形式の展開について明らかにしていない。資本は、商品や貨幣と同様に、生産関係の如何にかかわりなく、流通の発展さえあれば出現するものである。実際は資本主義に先立つ諸社会では、 $G - W - G'$ や $G - G'$ は具体的に商人資本と高利貸資本として現れたのである。確かに、労働力の商品化を基礎とし、資本が社会的生産を編成することによって資本主義社会は始めて成り立つのであるが、流通論の段階で、商人資本と高利貸資本は資本として論じられるべきものだと考えられる。

商人資本と、高利貸資本を明確に位置づけたのは宇野弘蔵である。マルクスの『資本論』の第一巻「資本生産過程」、第二巻「資本の流通過程」、第三巻「資本主義的生産の総過程」という構成法をとるのに対し、宇野の『経済原論』は第一篇「流通論」、第二編「生産論」、第三編

「分配論」という構成になっている。『資本論』の第一巻第二篇第四章の「貨幣の資本への転化」は、宇野の『経済原論』では流通論の第三章「資本」に対応するわけである。こうして、宇野はマルクスと異なって流通論で資本形式の展開を検討する方法を示したのである。特に商人資本と高利貸資本の位置を明確にしたことは評価できるであろう。

宇野の『経済原論』における資本形式の展開について、章をかえて検討する。

二 宇野弘蔵の『経済原論』における資本形式の展開についての検討

2-1 流通形態としての資本形式の展開の意義

前章では、『資本論』の第二篇第四章「資本の一般的定式」を検討し、マルクスの資本の定義は結局のところ、産業資本にそくして与えられたものになってしまい、商人資本と高利貸資本が位置付けられていないということを見た。しかし、資本は、商品経済に特有なものであってむしろ生産過程と直接に関係なく、貨幣の特殊な使用方法から発生するものであり、当然商人資本や高利貸資本について規定しなければならない。宇野弘蔵はマルクスの『資本論』を整理し、「流通論」、「生産論」、「分配論」という三篇構成をとり、資本の社会的編成について「生産論」で検討し、流通形態としての資本は「流通論」で検討すべきだと強調した。この点について宇野は次のように論じた。

「商品経済は、経済生活の基礎をなす生産過程自身から発生するものではなく、いわば生産過程と生産過程の間に発生した交換関係に特有なる形態をもって、漸次に生産過程に影響し、浸透し、これを把握することによって、生産過程にその実体的基礎を確保することになったのであって、いわゆる生産論をもって始めることはできない。原理論としては当然に生産論から始めることによって経済過程をその基礎から解明すべきもののように考えられるのであるが、実はそうでない。『資本論』が、その第一巻を[資本の生産過程]と題しながら、またその労働価値説を商品生産に基づいて最初に論じながらも先ず商品、貨幣、資本の形態規定を展開し、資本の出現の後に始めてあらゆる経済の仕方に共通な労働過程を論じて、資本の生産過程を説いているのは、なお方法的には不明確なるものを残しながらも、正しく商品経済のこの特殊性を把握していることを示すものといってよい。かくて商品経済の原理を明らかにする経済原論は、当然に流通論をもって始められ、生産論はこの流通形態によって把握された生産過程として、その次に展開されることになるのである。」(宇野[1964]: 16)

宇野が指摘したように、マルクスは「商品」を『資本論』の冒頭において論じたのであるが、労働生産物が商品として交換されることを前提に論じたため、価値実体を導き出そうとする論証を先ず行ってしまい、労働価値説の論証も十分なものとして展開できなかつただけではなく、価値形態の議論も不十分なものになってしまったといつてよい。資本も同じように、元来は生

流通形態における資本の三形式の展開について（注）

産過程に関係ないものとして発生したものであるから、流通論で論じられるものだと考えられる。社会的生産を編成する資本については次の「生産論」で展開されるべきだと考えられる。資本主義的生産というのは、そもそも一定の歴史的条件による労働力の商品化を基礎として成り立つものである。その社会的生産はあくまでも個別的な流通主体による個別的な運動の形態としての資本の下で行われているのである。こうしたことを踏まえると資本主義的生産を考察する前に、先ず本来の流通形態としての資本について明確に規定しなければならないと考えられる。

次いで、宇野弘蔵の旧『経済原論』¹と新『経済原論』²を比較しながら、流通形態としての資本三形式の展開について検討してみよう。

2-2 宇野弘蔵の旧『原論』における資本の三形式の展開について

マルクスが『資本論』において商人資本と高利貸資本を規定しえなかったのに対し、宇野は旧『原論』でこれらを商人資本形式と金貸資本形式として位置づけた。

宇野は世界貨幣が国際的な商品の取引における支払い手段や購買手段として新たな貨幣機能と規定し、 $G - W - G'$ を「一定量の貨幣を投じてより多くの貨幣を得るために行われる売買」（宇野[1973]: 70）として世界貨幣から資本へ導き出すことを論じた。続いて、宇野は $G - W - G'$ を商人資本形式として位置づけたのである。宇野は $G - W$ と $W - G'$ と二段階をなして分析し、どちらの段階においても貨幣は、「単に商品を購入するのに使用せられ、商品を販売して得られるものにすぎない」（宇野[1973]: 73）と論じた。その形式の資本は「相手が安く売るか、高く買うかすることの出来る範囲において行われる価値増殖」（宇野[1973]: 73）であり、このような価値増殖は「社会的に支配的になりえない」（宇野[1973]: 73）と論じた。

商人資本の利潤は偶然的、個人的事情によって異なることに対し、宇野は価値増殖の「実質的な基準」（宇野[1973]: 76）を求めるため、流通過程外にあっての平均化を媒介する $G - G'$ という資本形式を展開した。 $G - G'$ は「種々異なる利潤率と回転とを基礎にして一定期に一般的利率をもって」（宇野[1973]: 76）価値増殖が行われるのである。すなわち「貨幣自身を取引する特殊の商人の転化した金貸資本」（宇野[1973]: 76）として現われたのである。

このように、宇野は流通過程で商人は安く買い、高く売るというできる範囲で行われる価値増殖、いわゆる $G - W - G'$ を商人資本形式として規定したが、価値増殖の実質的な基準を求めるために、流通過程外における $G - G'$ を金貸資本形式として規定したのである。この二資本形式の位置を明らかにした宇野の観点は評価できるであろう。しかし、宇野は二資本形式について、「必然的な根拠を有する価値増殖ではない」（宇野[1973]: 73）と述べ、これらの資本形式自身には積極的な意義を認めていないように思われる。宇野は商人資本形式と金貸資本形式について次のように論じた。

「この二つの形式は各々資本の性質の一面を示すものにすぎない。資本は流通過程に発生しながら、その価値増殖をしなければならないのであるが、直接的に流通過程で価値増殖をなすということは、結局不等価交換によらざるをえないのであって、それは決して商品経済的に合理的根拠を有するものではない。」(宇野[1973]: 72)

確かに商人資本の利潤は不安定なものであるが、しかし、商人は市場で商品を安く買い高く売ろうと工夫しているはずであり、市場の不確定性による時間と流通費用もかかるので、これはかならずしも不等価交換とはいえないであろう。もちろん相手の無知を利用し、商品を不当に安く買ったり、高く売ったりすることは不等価交換であるが、しかし商人資本は市場の価格差を利用して利潤を追求ものであり、必ずしも価値増殖が行われたいとはいえないであろう。そうすると、商人資本は「資本の性質の一面を示すもの」(同上)ではなく完全な資本形式として論じられるべきである。

無論、この問題は後に考察される産業資本形式にも及ぶ。宇野は産業資本形式を、商人資本形式と金貨資本形式という先行する二形式を含みつつ、貨幣の資本への転化を完成することとなると論じた。先行する二形式は、資本の抽象的一面にすぎないのに対し、産業資本形式が商品経済を全社会的に確立する完全な形式として論じられたのである。

宇野は産業資本は「G - W の過程ですでに一定の、新たな商品の生産に必要なものを商品として購入しなければならない」(宇野[1973]: 79)と論じ、その新たな商品は労働力商品であることを明らかにした。そして最後に宇野は労働力商品は「流通論で明らかにし得ることは出来ない」(宇野[1973]: 82)のものであると述べ、進んで生産論においてその点を明かにすると論じた。

このような展開を見ると、宇野は産業資本を流通論と生産論とを結ぶものとして論じようとしていると考えられる。先行する商人資本形式と金貨資本形式は産業資本の「性質の一面を示すもの」(同上)とされ、それ自身では価値増殖できないと論じられた。産業資本形式になって初めて労働力商品による価値増殖活動が可能になると論じるのである。そして、労働力商品が資本家によって消費せられるものであるから、これは流通論では明かにすることは出来ず、生産論で論じるべきであることが強調されるのである。しかし、宇野が自ら明かにしているように「流通論」で資本は商品と貨幣と同じように、もともと生産過程に関係ないものとして、つまり、流通形態としての資本形式を論じるべきであるのに、ここでまた労働力商品を提起し、産業資本形式については流通論で明かにし得ない、「生産論」で明かにすると論じるのであれば、これは宇野が折角流通論を独立させて論じているという方法と不整合になっているといわざるをえない。しかも、冒頭で資本を論じるさいに、宇野は「世界貨幣」を提起し、貨幣機能の延長線で資本を展開した。「世界貨幣」はあくまでも国際的あるいは国家的なレベルで支払手段、購買手段として機能しているだけであり、そもそも新たな貨幣機能とはいえないであろう。したがってこの宇野の議論にあっても、貨幣から資本への転化には問題があると考えられる。

流通形態における資本の三形式の展開について（注）

資本の三形式の展開については宇野は新『原論』でまた異なった論証方法を示した。次いで、新『原論』を検討しながら、問題点についてさらに考察してみよう。

2 - 3 宇野弘蔵の新『原論』における資本の三形式の展開について

宇野は新『原論』において、商人資本形式と金貸資本形式の展開について、歴史上具体的に現れた商人資本と金貸資本をその論理展開の背後に「指針を与えるもの」（宇野[1969]：44）として論じるとした。そして、それに対応して、産業資本も先行する二形式の展開を通して、同じ流通形態としての資本として導出されるのではなく、「一定の歴史的条件のもとで、直接に生産そのものを把握する形態」（宇野[1964]：20 - 21）として論じられる。

まず、 $G - W - G'$ と $G - G'$ についてみてみよう。

「 $G - W - G'$ の形式は、具体的には資本主義に先だつ諸社会においても、商品経済の展開と共に、あるいはむしろその展開を促進するものとして商人の資本に見られるのであるが、それは商品を安く買って高く売るということにその価値増殖の根拠を有するものである。……その価値増殖は社会的に一般的根拠を有するものではない。ところがこういう資本形式の出現はまたそれを基礎にして、いわば資本に対する資本として、 $G \dots G'$ という資本のほかの形式を展開する。具体的に $G - W - G'$ の商人資本に対して、 $G \dots G'$ は金貸資本として現われる。即ち商人に資本を貸付手その利潤の一部分を利子として得ることになるのであるが、それはもはや本来の流過程において剰余価値を得るものではない。」（宇野[1964]：40 - 41）

見られるように、宇野は商人資本形式や金貸資本形式を具体的な前期的商人活動ないし高利貸資本を念頭に置いて論じているといえる。

また、二資本形式の展開についての歴史的な規定は次のようにも論じられている。

「しかしマルクスも『貨幣の資本への転化』を説くにあたって、まず最初に『商品流通は資本の出発点である。商品生産と発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的前提をなしている……』といているように、十六、七世紀の西欧諸国、特にイギリスにおける資本主義の発生期における商人資本の役割は、『貨幣の資本への転化』の理論的展開において、その背後にあってその指針を与えるものといってよい。商人資本にしても、金貸資本にしても、十六世紀の西欧諸国に初めて出現するものではない。しかしこれらの資本形式から産業資本的形式が展開するのは、まさにこの十六世紀以降のイギリスにおける資本主義の発展の過程においてであった。」（宇野[1969]：44）

このように宇野は歴史的生成論によって商人資本形式と金貸資本形式を展開しようとする。しかし、前章で繰り返して強調したように、資本は流通論における商品流通の市場論理的アプローチから考察できるのであり、歴史的な要因に依拠する必要はないと考えられる。宇野が二資本形式について歴史的な規定を加えて資本形式を展開したことは問題があるといわなければ

ならない。

次いで、宇野は産業資本形式を論じるさいに、その形式の基軸をなす労働力の商品化が流通形態から導出できるものではないことを根拠として、産業資本形式は単なる流通形態で展開される形式ではないと論じる。

「産業資本的形式は、形式としても生産過程を包摂するものとして当然に、労働力自身の商品化を前提とする。ところが労働力商品は、他の商品と異なって生産物の商品化ではない。それはいわば商品、貨幣、資本の形態規定自身の展開の内に当然に前提されるものとしてすまずわけにはいかない。資本主義に先だって商品経済の行われる社会自身の歴史的变化によって初めて与えられるのである。いいかえれば資本は、そういう社会的基礎条件が与えられるまでは、商人資本、金貸資本の形式に留まらざるをえなかったのである。……したがって若し吾々が、経済学の原理的展開においても、商品、貨幣の展開と同様に、資本の諸規定の展開をも、単なる形態的なものとして行うとすると、この産業資本成立の歴史的基礎前提を無視することになる。従来、しばしば商品、貨幣論で、いわゆる単純商品生産の社会的が想定され、商品経済の発展と共に、小商品生産者が分解されて、労働力の商品化もそれによって実現されるかのようによに説かれてきたのであるが、それは資本の原始的蓄積の過程のうちに解消することになるのであって、資本主義の発生期における商品資本乃至金貸資本の役割を十分に評価し得ないことになる。」(宇野[1969]: 43 - 44)

このように、産業資本的形式の論証方法は先行する二形式と明かに異なっている。宇野はここで産業資本は生産論で論じるべきものとし、その規定も資本主義社会に先だって具体的に現われる、商人資本、金貸資本を踏まえて与えられざるをえないと論じていると解されるのである。要するに、宇野は商人資本と金貸資本を「流通論」で考察し、産業資本を「生産論」で考察するようになったといえるのであり、流通形態としての資本と産業資本そのものとの間には論理次元の断層があると考えられるのである。資本はそもそも商品、貨幣と同じように生産過程に関係ないものであり、純化した流通形態で論じられるものとしてとらえるべきである。そして、これが宇野自ら「流通論」を独立させた方法と合致するものであると考えられる。山口重克はこの問題について次のように指摘した。

「このような産業資本的形式とそれに先行する二形式とのあいだに方法上の断層があるかのような説明は、流通論と生産論との論理次元の異質性をかえって不明確にするものといわなければならない。……資本の産業資本的形式を、流通形態としての資本の規定性においてではなく、現実的に社会的生産を分担して運動している産業資本そのものに引きつけて理解することから、商人資本的形式や金貸資本的形式について前期的な商人資本や、金貸資本にひきつけた説明が与えられることになり、必ずしも流通形態として純化された規定になっていないところが残ることにもなっているのである。」(山口[1983]: 148)

山口の指摘は妥当であろう。宇野は、資本主義の発生期の商人資本の役割が貨幣の資本への

流通形態における資本の三形式の展開について（注）

転化の理論的展開に対して、「指針を与えるもの」（宇野[1969]42）と規定しており、宇野の商人資本及び金貨資本についての規定は歴史的に実在していた具体的資本に即した説明になりかねないという問題をはらんでいるのである。そしてその歴史的な要素を反映した商人資本形式、金貨資本形式の規定を媒介して産業資本が導出され、その内容としては「生産論」で展開すべきものが含まれていると論じられている。このような展開方法で流通形態として資本形式を規定することはできないだろう。宇野はそもそも生産過程に関係ない商品、貨幣、資本を「流通論」として独立させ、展開したわけであり、そう論じることは高く評価できる。しかし、宇野の資本三形式の展開にあたっては、歴史的な経緯を背後におくという方法を提唱し、その結果、産業資本と先行する二形式の間に論理次元の断層があるかのような展開になったことは、宇野の展開の問題点であるといわざるを得ない。

次章において資本三形式を純化した流通形態として展開することについて検討する。

三 流通論における資本三形式の展開についての再検討

3-1 流通論における生産の措定について

資本の三形式を「流通論」で検討する際には、資本は歴史的な規定に依拠する必要はないと考えられる。すでに論じたように、商品経済はもともと共同体と共同体の間の生産物の交換から発生したものだから、商品流通形態は生産に直接に関係あるものではない。資本主義は一定の歴史的な条件のもとに社会的生産を包摂し、編成することによって成立した。宇野は三篇構成を提起し、商品、貨幣、資本をまず独立の「流通論」のもとで純化した流通形態として分析し、「生産論」ではそうした資本が社会的生産を包摂したことを対象にして分析し、「分配論」では資本を編成することを分析するという方法がとられている。したがって、流通論における商品流通の市場論理的アプローチから資本を考察すれば、歴史的な要因に依拠する必要はないと考えられる。

問題となるのは、「流通」と「生産」との重層的構造を有している産業資本形式をいかにして理解するのかということであり、それを理解するための認識の基準となるのはなにかということにある。流通による生産の措定は可能なのか？実はマルクスは流通と生産について次のように論じている。

「流通に前提されているものとは、諸商品(特殊的形態をとろうと、貨幣という一般的形態をとろうと)なのであり、この諸商品は一定の労働時間の現実化であり、またそうしたものとしての諸価値なのである。つまり流通の前提とは、労働による諸商品の生産であるとともに諸交換価値としての商品の生産でもある。これが流通の出発点であり、また流通はそれ自身の運動を通して、自らの運動の結果としての諸交換価値の生産でもある。これが流通の出発点であり、

また流通はそれ自身の運動を通して、自らの運動の結果としての諸交換価値を作る生産にたちかえるのである。したがってわれわれはふたたび出発点に、すなわち諸交換価値を措定し、それらを作り出す生産に到達したのだが、しかしこんど場合は、生産が流通を展開された契機として前提しており、生産はまた、流通を措定し、さらにたえず流通から自分にたちかえってはふたたび流通を措定するような、たえざる過程として現れるのである。」(Gr.,S.177-178)

マルクスが論じたように、労働による商品の生産、交換価値の生産は、流通の出発点であり、そして生産より流通は自身の運動を通してふたたび出発点に回復するものである。しかし、このような「生産」は必ずしも資本主義的な社会生産とは限らなく、利潤を得るために、流通を通じて商品の交換価値を実現しようとする生産である。実際には流通形態における最初の交換は、生産の全体を捉えて規定したものではなく、剰余物の交換として現れたのである。社会的生産は一定の歴史的な条件に与えられた労働力商品が売買されることによって成り立つのである。したがって「社会的生産」による産業資本と純粋な流通形態としての産業資本形式は区別して論じなければならない。こうして市場理論のアプローチから考えると、流通形態としての産業資本形式は十分に論じられると考えられる。したがって「産業資本の形式は生産からはじまり流通を通して、流通により媒介された生産の措定である」(小林[1967]:285)といてよいであろう。

マルクスと宇野は流通形態として資本を分析し始めたが、結局徹底した論証方法を示さなかった。マルクスは産業資本を資本と同一視するのに対し、宇野は先行する二資本形式は流通形態として論じたが、一方で産業資本の基軸となる労働力商品は流通形態から出るものではないことを根拠として、産業資本は「生産論」で論じるべきと主張した。

しかし、社会的生産ではない「生産」は「流通論」でも問題にしうるのであって、必ずしも「生産論」で出現するものではないから、「流通論」でも検討される。流通における生産を措定すれば、重層的構造を有している産業資本も純化した「流通論」で論じられるであろう。

次いで、資本の三形式の展開について検討する。

3-2 流通論における資本三形式の展開について

資本の三形式について徹底して論じたのは山口重克である。山口は『経済原論講義』のなかで、純化した流通論における資本形式を論じるさいには、歴史的な規定をいっさい考慮せず、市場論理のアプローチから考察する。資本は価値の増殖を追求する運動体であり、価値の姿態変換による増殖運動体であると規定し、そして資本はその投下様式ないし投下対象によって、商人資本、産業資本、金貸資本をそれぞれに商品売買資本、商品生産資本、貨幣融通資本という三つの資本形式として規定したのである。

山口はG-W-G'を論証する場合にも、W-G-Wと同じように、流通主体の行動に即しな

がら論じる。現実の市場では、異なった条件によってどうしても商品の価格差が存在する。富を追求するためには、商品の時間的価格差ないし場所的価格差を利用して増殖行動を展開しようとする商品所有者は出てくるはずである。こうして「ある時点ないし地点で商品を安く買ってほかの時点ないし地点で高く売るという商品売買形式によって、貨幣をいったん手放し、より多くの貨幣として引上げようとする」（山口[1985]：58） $G - W - G'$ は第一形式、商品売買資本として規定された。このように、富に対する欲望の追求が流通形態としての資本形式の展開の動力になるといってよいであろう。

しかし、商品流通世界における個別流通主体が入手する需要動向及び価格動向についての情報はバラツキがあるので、これらの情報に基づいて行われた価値増殖も不均等化が生じるのである。そこで安定な価値増殖を求めため、新たな増殖形式が要請される。

ここで山口は宇野のように $G - G'$ を展開するのではなく、貨幣を商品の購入のために支出するものという第一形式との共通点から商品生産資本、すなわち $G - W \dots P \dots W - G'$ を第二形式として導き出したのである。第二形式は商品自体を再び販売するためではなく、「異なる使用価値の新しい商品を生産するための生産要素として消費されるのであり、資本家は生産要素に対して手放された貨幣を新しい生産物の販売によって回収し、増殖しようとする」（山口[1985]：63）資本形式である。この資本形式は生産要素が入っているため、第一形式のように単純、明確な行動原則によって価値増殖が行われるのではなく、その利潤の形成は「ある商品の価格とその商品を生産するために要する生産諸要素の価格の合計の差額を源泉」とするのである。すなわち、山口は生産諸要素の需給関係によって規定されるだけではなく、生産過程の内部でそういう価格差も作り出すと論じたのである。もちろんそれぞれの要素は市場の需給関係に規制されているが、第一形式より第二形式の価値増殖の確実性が高いといわざるを得ない。

このように、山口は第一形式と第二形式においては、「資本家は自分の商品の生産活動に従事したりして自分の貨幣の増殖を追求し、その結果としての増殖分は全額自分が取得した」（山口[1985]：71）と論じる。

以上の二つの資本形式を論じた後、山口は貨幣融通資本を第三形式とし、「貨幣を追加的資本力として融通し、この追加によって増加した増殖分から何らかの分け前の分配を受けることによって自ら貨幣の増殖を図るといふ、いわば寄生的な増殖の形式である」（山口[1985]：71）と論じた。

山口が資本の三形式を整理するさいに、歴史的な規定をいっさい考慮せず、商品流通世界における個別流通主体の行動にそくして考察するという方法をとったことは評価できるであろう。しかし山口の展開ではこのように資本の三形式はそれぞれ独立に論じられたが、三形式それぞれの間の論理的な関係はほとんど触れられていない。山口はただ、貨幣を商品の購入のためのものであり、資本家は自分の商品の増殖活動に積極的に従事することという共通点だけで、商品売買資本から商品生産資本へという順序で形式を展開した。最後に貨幣融通資本は貸付相手

に貨幣を貸し、資本に対する使用、収益などの諸権利は制限されることによって「寄生的な」形式として論じたのである。これでは資本の三形式は内的な論理で展開されているとはいえないであろう。

山口自身は「一般的富の無限の保蔵・蓄積行動が展開するさらに発展した関係の形態が資本である」(山口[1985]:54)と論じ、ここで資本形式の展開の内在的な動力は富に対する追求ということを明らかにした。しかし山口の論証をみると、必ずしも価値増殖の追求によって、資本形式の展開が論じられているとはいえないだろう。第一形式の商品売買資本は単純な、明確の行動原則に従って、商品を販売する目的で価値増殖が行われる。その需給関係の変動や情報の不完全性などの要因の影響で、その価値増殖は安定的な価値増殖ではない。安定的な価値増殖を追求するために、需給関係だけに規制される形式ではなく、生産運動の内部で作り出す価値増殖という第二形式の商品生産資本を導き出したのである。しかし、第三形式の貨幣融通資本はあくまでも「寄生的な」資本形式であり、確定的な価値増殖が可能であることはできないであろう。

富の追求を資本三形式の展開の内的な動力とすれば、山口の資本形式の展開の順序は必ずしも合理的なものとはいえない。では、三形式の展開はどのように整理すればいいのか、節を改めて、さらに検討してみよう。

3-3 資本の三形式の展開の試み

流通論における資本三形式の展開を考察するさいに、まず、市場のアプローチで個別流通主体の行動にそくして考察し、しかも歴史的な規定を考慮しないということを前提にしなければならない。資本は最初に流通形態のなかで出現したものであり、流通論でその純化した形式を論じるさいに、歴史的な規定に依拠する必要はないと考えられる。

次いで、価値増殖の追求が資本形式の展開の動力となると考えられる。流通において最初に論じられるべき資本形式は商品売買資本である。この資本形式は利潤を追求するという単純、明確な行動原則によって、「ある時点ないし地点で商品を安く買ってほかの時点ないし地点で高く売るといふ商品売買形式によって、貨幣をいったん手放し、より多くの貨幣として引上げようとする」(山口[1985]:58)というふうに価値増殖が行われる。しかし、流通世界の需給関係の変動や、情報の不完全性などの不確定的要因に強く左右されるため、価値増殖の活動は安定的なものではない。一層安定した価値増殖が追求されると考えられる。

G-G'という資本形式は商品売買資本のように貨幣で商品を買うのではなく、貨幣の使用権を直接に商品として販売することによって、代価として利子を獲得する資本形式である。利子率と期間が定められたので、形式上では安定的な価値増殖が行われるといえるであろう。貨幣融通資本の流通主体が直接に価値増殖活動に参加していないが、増殖の確実性を保つために、

流通形態における資本の三形式の展開について（注）

市場動向の調査や貸付先の信用調査、経営状況などの情報収集が不可欠である。こういう意味で、資本家の流通活動は価値増殖に対して不可欠なものであろう。しかし、貸付費用を投じてもかならずしもその契約した期間に利子が返還されるという確実性はないのであり、十分安定した価値増殖とはいえないであろう。

以上の二資本形式は流通を通して積極的に価値増殖が行われているが、それぞれに限界があり、その利潤率は決して安定的なものであるとはいえない。さらに確実な価値増殖を追求するため、生産要素が入っている商品生産資本へ展開される。

商品生産資本形式はよりいっそう安定した利潤を追求するため、ただ商品を安く買い、高く売るだけではなく、生産を通して新たな商品が形成され、販売されることによって価値増殖が行われているのである。この資本形式の利潤は、商品の価格差だけではなく、その商品を生産するために要する生産諸要素の価格差も計算しなければならない。すなわち、生産諸要素の需給関係によって規定されるだけではなく、生産過程の内部でそういう価格差も作り出すのである。こういう意味で、商品売買資本形式と貨幣融通資本形式と比べると、商品生産資本形式の価値増殖は相対的に安定したものといえるだろう。ここで強調しなければならないのは、ここで論じられた「生産」はけっして資本主義的生産、すなわち社会的生産が資本によって編成されていることを全体としての生産である必要ではなく、部分的に労働が商品化されて成立したものである。いわゆる価値増殖を実現するため、流通を通じて商品の交換価値を実現しようとする生産である。

このように、流通論では価値増殖の追求が資本形式の展開の内的な動力であるとするれば、資本は利潤を安定的に得ようとすることによって、商品売買資本形式、貨幣融通資本形式、商品生産資本形式という順序で資本形式は展開されることになるであろう。資本の三形式はそれぞれに独立しているようにみえるが、実際には富にたいしての追求をその展開の内的な動力とし、流通を通して積極的に増殖活動が行われる。このように展開することによって、流通形態としての資本はそれぞれに完全な資本形式をもち、また相互に関連しているといえるのである。

<注>

- 1 これは宇野 [1973] を指す。以下、同書については旧『原論』と表記する。
- 2 これは宇野 [1964] を指す。以下、同書については新『原論』と表記する。

<参考文献>

宇野弘蔵 1964 『経済原論』岩波書店。

宇野弘蔵編 1967 『資本論研究 商品・貨幣・資本』筑摩書房。

宇野弘蔵 1969 『マルクス経済学の諸問題』岩波書店。

- 宇野弘蔵 1973 『宇野弘蔵著作集 第一巻』岩波書店。
小林弥六 1967 『経済学批判体系の生成』御茶の水書房
山口重克 1981 『資本論の読み方 宇野弘蔵に学ぶ』有斐閣
山口重克 1985 『経済原論講義』東京大学出版社。

K.,I.S. Marx,K.,1962 *Das Kapital*,Band I,Marx-Engels werke,Band 23,Dietz Verlag,1962.

Gr.S. Marx,K.,1976 *Oekonomishe Manuskripte 1857/58*,2.Abteilung, Band 1, Teil 1 in *Karl Marx, Friedrich Engels:Gesamtausgabe*,Dietz Verlag.

主指導教員（菅原陽心教授）、副指導教員（藤井隆至教授、佐野誠教授）